

Psychiatrists on Psychiatry : Conversations with Leaders

Dinesh Bhugra ed
Oxford University Press
2023年11月 272頁

No Image

「理想的な指導者とはどういう人か」「精神医学をよりよくするためには何が必要か」——この問いを明らかにするべく本書でインタビューを受けている26人の精神科医は全員が、各国の精神医学会やWHOをはじめとした世界的機関を通じて領域を先導してきたリーダーである。インタビュアーはインド出身・英国 Royal College of Psychiatrists の元理事長/World Psychiatric Association 理事長の Bhugra 医師であるためか、英米 vs 非英語圏間でよくみられる権力勾配は一切感じられない。むしろ中近東、アフリカ、南米、アジア（日本からは日本精神神経学会元理事長・神庭重信先生）の指導者達と、困難な課題を共に乗り越え、同時代を生きてきた仲間として語り合っている様子が印象的だ。異なる文化での幼年期、精神医学を選んだ理由、恩師、研究・臨床・教育・政策の成果、若い頃の自分に与えたい助言についての各自の語りはそのまま現在の精神医学文化のダイバーシティを反映しているが、評者には特に以下の3点が興味深かった。

第1に、若い頃に出会った「問い」とその後の発展が、その人の生きざまと重なることで、あらたな学問的領域が切り拓かれていく様子が手に取るようにわかることだ。例えば、黒人・同性愛者として、軍やコミュニティの差別撤廃に尽力したジョーンズや、紛争を逃れ外国の里親に預けられたが幸福な幼年期を過ごした後、ルーマニアの児童養護施設における虐待や養子縁組研究により自閉症領域に斬新な発見をもたらしたラター。彼らが直面した問題の歴史的重みからも、精神医学が取り扱う「苦悩」とはバイオリジカルであると同時に、きわめてソーシャルなものである

ことをあらためて感じる。

第2は、恩師との出会いや、教育の重要性だ（医学生の間にもロールモデルと出会うことが推奨されているが、良き臨床家、研究者が必ずしも教育に熱心でないという問題点も指摘されている）。WHOの多機関研究に参加することで、世界的ネットワークを得たという方も多い。さらに、1人の患者を1時間以上かけて診察し、幼年期からの生活史や病歴について10頁にもわたる記録を作成した指導医時代の思い出や、診療録画を general practitioner (GP) と一緒に観ることで、精神科ならではの視点を学べたといった若い頃の経験に比べて、現在は操作的診断基準に頼りすぎるがあまり、クッキーの抜型でくりぬいたような診療教育になっているとの懸念も表明されている。薬物療法や脱施設化の恩恵を指摘しつつも、長期間にわたり患者とじっくりかかわることが難しい急性期モデルでは、個人の人生を追うことで初めてみえるような臨床の厚みが失われるのではと憂う声も多い。

第3は、医学部の内部に残る精神障害・精神医学に対するスティグマの弊害と、この数十年ですっかり様変わりした精神医学の未来に対して、オプティミズムが感じられることだ。1960年代の社会論から、バイオロジーに一気に振れた1990年代を経て、現在は診断・治療の手段も各段に増えた。精神医学が科学的厳密性を備えたがゆえに、精神障害がバイオのみで解明できるような、単純な「自然種」ではないとの認識も逆に高まっている。精神障害を理解するためには神経科学や薬理学のみならず人文社会科学も含めた複合的視点が欠かせないことが各国の医師によって論じられている。神庭先生も指摘するように、biopsychosocialが複雑に絡み合った、高度な統合的疾患モデルこそが、精神医学が医学や政策にもたらし得る独自の視点であり、この領域の最大の魅力であろう。

本書で際立つのは、精神医学という文化の内的多様性（トラウマやホスピスケアなど、以前は認識すらされていなかった領域の発展を含め）であると同時に、「何が大切か」に関してリーダー達の間で、国や文化を超えて驚くほどの共通性がみられることだ。グローバルな潮流のなかで日本の精神医学の方向性を捉え直すためにも最良の1冊だ。

(北中淳子)